（第三種郵便物承認）

# 高校人国記

## 広島女学院高校（広島市中区）④

# 核廃絶を訴え 国内外で活躍

廃虚となった広島女学院高等女学校＝現在の西校地（撮影・岸本吉太さん　提供・岸本坦さん）

**メモ**

＜原爆被災の記録集＞「夏雲」広島女学院教職員組合平和教育委員会（中野修作委員長）が1973年にまとめた。生徒や父母、教職員の手記34編や被災状況、戦時下の受難の記録などを収める。英訳版も制作され、現在も教材として使われている▽「平和を祈る人たちへ」被爆60年の2005年に広島女学院同窓会（古屋由利子会長）が刊行。同窓生60人の手記を収録。英語版も作成した。被爆70年の15年には同窓会（大矢みどり会長）が新たな証言や「夏雲」収録の手記の抜粋などを加え、増補改訂版を出版した。

被爆者　サーロー節子

「私の愛する都市は1発の爆弾によって消滅したのです…」。2017（平成29）年12月10日、ノルウェー・オスロ。核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN（アイキャン））へのノーベル平和賞授賞式で、**サーロー節子**(87)は講演した。核兵器を「絶対悪」とし、核兵器禁止条約を「核兵器の終わりの始まりにしようではありませんか」と。

広島女学院高等女学校（高校の前身）2年の時、動員先の第二総軍司令部（広島市東区）で被爆。倒れた建物に閉じ込められ火の迫る中、間一髪で脱出した。だが親族8人と同級生多数を失った。「なぜ広島で多くの人々が殺されなくてはならなかったのか、こんな目に遭わせる神様とはどんな神様なのか―宗教の先生に問い掛けました。先生は『戦争は人間と人間がするのです』といったことをこんこんと話してくださいました」

大学を含め10年間いた女学院。「人間とは」「生きるとは」と考え続けたことが「人生の原動力」となったという。のちにカナダ人宣教師と結婚。カナダでソーシャルワーカーとして働きながら反核活動を続けた。

原爆が投下された1945（昭和20）年8月6日、高等女学校は大半の生徒が兵器製造や建物疎開、暗号翻訳に動員されていた。現在の広島市中区国泰寺町で建物疎開の後片づけをしていた1、2年生はほぼ全員が死亡。爆心地から1・2キロの校舎は瞬時に倒壊し火に包まれた。東校地に立つ原爆犠牲者之碑に刻まれた生徒や専門学校（大学の前身）学生、教職員は351人。被爆前は「キリスト教主義学校」として憲兵隊からの迫害もあったという。

## 「人間とは」「生きるとは」考えた10年

山田玲子

11歳で被爆した**山田玲子**(84)は2年後、女学院中学に入学。大学卒業まで過ごした。苦しかったそれまでと違い女学院では「夜が明けたような気持ち。自由で明るくて先生方も熱心でした」。東京の被爆者団体「東友会」の役員などを務め、被爆者の相談事業や証言活動に取り組む。海外訪問も35回になる。「女学院で宣教師に同行し、孤児院や病院を訪問したことが、愛や平和に生きることにつながったと思います」

土屋時子

広島文学資料保全の会代表の**土屋時子**(70)も女学院で10年を過ごし、母校の図書館の司書になった。後に夫となる土屋清の作・演出による劇「河」と出合ってからは演劇も。一人芝居や朗読劇の構成演出をし、自ら演じた。女学院の原爆被災誌「夏雲」に基づく朗読構成劇「夏雲は忘れない」にはこんな言葉を引用している。「卑しいくだらない過去だったという恥に／身を焼くことのないように／生き通さねばならぬ」

「女学院では広瀬ハマコ院長が初代校長ゲーンス先生の教え『チェスト・アップ』についてよく話されました」。胸を張って顔を上げ自信を持って生きよ―との言葉。「演劇を通じ命と平和を守ること―これが私のライフワークです」

ボランティア団体「平和のためのヒロシマ通訳者グループ」代表の**小倉桂子**(81)は、

## 「演劇通じ命と平和守る。私のライフワーク」

小倉桂子

「女学院に行っていなかったら今の私はなかった」と話す。米国人教師の宿舎で見た文化的な生活。乳児院などへの訪問で知った奉仕活動の大切さ。高校へ進むと英語の集中コースで週に10時間の授業も受けた。今、ヒロシマを世界へ伝えるために海外からやって来る人々のコーディネートをしている。

竹内道

米ニューヨークで日本企業の海外進出を支援している**竹内道**(63)は9年前、高校や大学で軍縮教育を進める運動と出合って共鳴。国民の圧倒的多数が核問題に無関心な米国で、若い世代にヒロシマを伝えている。被爆当時広島赤十字病院長だった祖父のことを調べ、サーロー節子のドキュメント映画も製作中だ。元中学美術教師、**嘉屋重順子**(79)も米国で再三被爆体験を語るなど、平和活動を続ける卒業生は多い。サーロー節子、小倉桂子、そして広島女学院には谷本清平和賞が送られた。

＝敬称略

（客員編集委員・冨沢佐一）

次回は8日に掲載します。

「高校人国記」は広島、山口両県を中心に回って、高校ごとに話題の卒業生をご紹介しています。各校の情報をメールなどでお寄せください。

宛先は〒730―8677広島市中区土橋町7の1、中国新聞編集局「高校人国記」係。

メールは、bokou@chugoku-np.co.jp